

サビエル生誕五百年



巡礼の道

252

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

聖人の洗礼名（中）

長崎巡礼 ⑨

カトリック教会では洗礼を受ける時、聖人の名前を洗礼名（霊名）としてつけること



闇から光へ回心した聖アウグスチヌス

は前回ふれた。各聖人には聖人の祝日があり、受洗者はその日を自分の霊名の祝日として大切にす。

私の霊名は「アウグスチヌス」。先日の教会報に私の霊名の祝日は五月二十八日と記載されていた。自分では八月二十八日が祝日だと思っていたので、祝日ごとに聖人が紹介されている「教会の聖人たち」で調べてみた。

実はアウグスチヌスという聖人は二人いたのである。五月二十八日が祝日のアウグスチヌスは「カンタベリの聖アウグスチヌス」と呼ばれ、六世紀末から七世紀に活躍している。彼は教皇の命令を受けて当時、異教徒のアンゴロ・サクソン民族に支配されていたイギリスで、キリスト教の布教に務めて大きな成果をあげ、のちにカンタベリ大司教となった聖人である。

一方、八月二十八日が祝日の、私の霊名である聖アウグスチヌスは五世紀に活躍した神学者・哲学者で、キリスト教神学の礎を築いたと言われ、たくさんの著作を残している。中でも「告白録」は今日も読まれる名著。今回の長崎巡礼で訪れた城山教会を司牧するアウグスチノ修道会はこの聖人を模範として創立された会である。

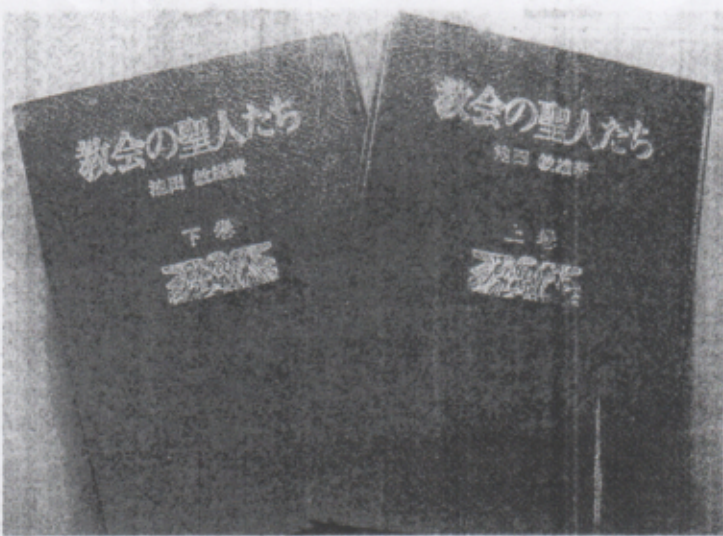
さて、娘に買いつけた聖人伝は聖人がアイウエオ順に紹介されており、最初に紹介されているアウグスチヌスを自分の洗礼名にしたのだが、しばらくすると、いい加減さだけでなく、軽薄な自分とは余りに違い過ぎることを自覚し、霊名に負担を感じ始めた。しかし変更するわけにもいかずそのままになっていったが、最近、改めて伝記を読み、身近な存在となってきた。

霊名のアウグスチヌスは三五四年、北アフリカ、今のアルジェリアで生まれた。十代で性愛の味を覚え、素性の悪い女性と同棲し、十八歳で父親となる。その後十四年間、その女性を連れ添うが、母モニカの強い説得でその女性と別れ、良家の結婚適齢期に達していない女性と婚約、さらに別の女性とも関係を持つなどふじだらな女性関係が目立つ。

信仰深い母モニカとの間で信仰を求め、迷い、疲れ、肉欲とたたかうが、三十三歳の時、息子と一緒に洗礼を受ける。ここからアウグスチヌスの回心が始まり、母と息子を失ったあとは祈りと研究を仲間との清貧な共同生活の中で始め、三十三歳で司祭に、四十三歳で司教になる。

名も知らぬ大勢の聖人たちが

紹介されている



を説き続けたのであるが、私は洗礼までの悪徳から聖徳へ、闇から光への大回心に人間、アウグスチヌスを感じ、彼が身近な存在になる。聖人と呼ばれるようになった人でも罪を犯す。罪人の回心こそ神が私たちに求められているのではある。

アウグスチヌスは自分が捨てた女性について「告白録」の中に書いている。そのようなアウグスチヌスこそが私たちにも回心への希望を与えてくれるように思える。霊名に対してどのような生きるかは結局、私自身にかかっていることは間違いない。